



東京大学 公共政策大学院 医療政策教育・研究ユニット

Health Policy Unit (HPU)

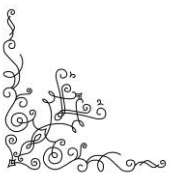
医療政策実践コミュニティー

Health Policy Action Community (H-PAC)

第 2 期 (2012 年度) 活動報告

2013 年 3 月

H-PAC 運営事務局



■東京大学 公共政策大学院 医療政策教育・研究ユニット(Health Policy Unit=HPU)の活動内容

教育活動: 東京大学公共政策大学院において「医療政策」「事例研究」の講義を行います。

研究活動: 医療政策における喫緊の課題に関する研究を行います。

社会活動: 医療政策実践コミュニティ(H-PAC)の主宰と公開シンポジウムを開催します。

■HPU 運営体制

東京大学公共政策大学院と大学院経済学研究科の教員・研究員により運営されております。

〔スタッフ〕埴岡 健一 客員教授／井伊 雅子 特任教授／辻 哲夫 特任教授／関本 美穂 非常勤
研究員／吉田 真季 特任研究員／古屋 絢子 特任研究員

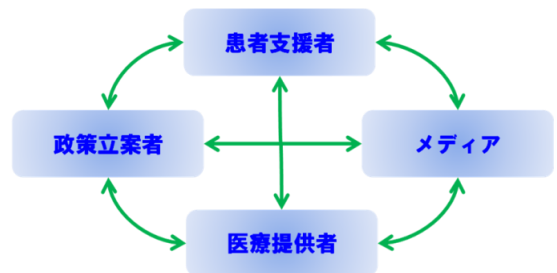
〔運営委員〕岩本 康志 教授／伊藤 隆敏 教授／関 啓一郎 教授／大橋 弘 准教授

■寄付企業・団体

グラクソ・スミスクライン株式会社、財団法人社会保険健康事業財団、日本イーライリリー株式会社、株式会社グローバルヘルスコンサルティング・ジャパン、MSD 株式会社、ヤンセンファーマ株式会社の寄付を基に、2013年3月までの約3年間設置されました。(企業名は申込順)

■医療政策実践コミュニティ(Health Policy Action Community=H-PAC)の活動内容

「医療を動かす」をミッションに掲げ、患者・市民、政策立案者、医療提供者、メディアの4つの立場から医療政策分野においてリーダーシップを発揮している社会人(学生も可)の参加者を募ります。医療政策の最先端課題を学び、さらに実践的なグループ活動により、政策提言や事業計画作成を行います。なお、大学の卒業資格や学位、単位などにはなりません。



■H-PAC 運営体制 (2012年度実績)

【外部アドバイザー】

大熊 由紀子氏(国際医療福祉大学大学院医療福祉ジャーナリズム分野 教授)〔メディア〕／勝村 久司氏(医療情報の公開・開示を求める市民の会 世話人)〔患者支援者〕／高本 眞一氏(三井記念病院 院長)〔医療提供者〕／信友 浩一氏(九州大学 名誉教授)〔政策立案者〕

【メンター】

伊藤 雅治氏(元厚生労働省医政局 局長)〔政策立案者〕／前村 聡氏(日本経済新聞社大阪本社編集局社会部 記者)〔メディア〕／三田村 真氏(NPO法人全国骨髄バンク推進連絡協議会 副理事長)〔患者支援者〕／渡邊 清高氏(国立がん研究センターがん対策情報センター 室長)〔医療提供者〕

【HPU内部アドバイザー】

井伊 雅子(東京大学公共政策大学院 HPU客員教授)／辻 哲夫(東京大学公共政策大学院 HPU客員教授)

【運営事務局】

埴岡 健一(東京大学公共政策大学院 HPU客員教授)／吉田 真季(東京大学公共政策大学院 HPU特任研究員)／古屋 絢子(東京大学公共政策大学院 HPU特任研究員)

■H-PAC 第2期プログラム概要

グループ研究と勉強会を並行して進めることがプログラムの特徴です。いずれも、東京大学本郷キャンパス内の会議室・セミナー室等において、ほぼ毎週の水曜 19～21 時に開催しています。

〈1〉グループ研究

○『グループ研究』は、H-PAC参加者が自主的にグループを形成し、自分たちで設定するテーマについて、社会への発信・提言を目的とした研究・実践活動を行うものです。各グループにはメンバーとして4つのステークホルダーから各1人以上が参画することを必須条件としました。

○成果物提出期限に向けて、各グループ主体で研究を推進します。事務局では、グループ形成やテーマ設定の助けとなる場づくりを行い、活動期間には、メンター／アドバイザーによるアセスメント(全3回)、中間報告会の場を設けて研究の進捗支援を行いました。

○毎週水曜の定例時間帯に打ち合わせ会場を設けるほか、各グループが自発的に集い、話し合いやフィールドワークを進めました。また、インターネットなどを活用した議論も積極的に行われました。

○成果物の形態は、各研究グループが以下の中から選択し、設定しました：

審議会等報告書の対案、政策提言書(行政向け)／立法向け要望書(国会議員、議員連盟など向け)／事業・非営利活動計画書／学術論文／書籍出版／ウェブサイト構築／シンポジウム等の開催

○成果物の審査・評価は、4ステークホルダーで構成される採点委員会により、以下6軸に沿って行いました：

ステークホルダー協業によるシナジー／テーマの重要性・喫緊性／実践・実現可能性／視点や切り口の新規性・独創性／論理性・実証性／表現力・訴求力

第2期グループ研究 8つのテーマ

テーマ・タイトル	形態	研究グループ	メンバー内訳
医療政策決定プロセスにおける住民・患者の参画	提案書	患者支援者 4 医療提供者 1	政策立案者 1 メディア 1
「将来につながる、よりよい医療」を考えることのできる市民を育てる	提案書	患者支援者 5 医療提供者 1	政策立案者 1 メディア 1
待合室を変えようプロジェクト	事業計画書	患者支援者 7 医療提供者 12	政策立案者 8 メディア 9
『知る場—ズ』(シルバース)の設立	事業計画書	患者支援者 2 医療提供者 2	政策立案者 3 メディア 3
あなたが伝える患者情報 8カ条	提案書	患者支援者 3 医療提供者 3	政策立案者 1 メディア 2
人生の最期を考える社会を	提案書	患者支援者 1 医療提供者 3	政策立案者 2 メディア 1
国民の医療への受療機会(アクセス)の格差を縮小する	提案書	患者支援者 1 医療提供者 2	政策立案者 3 メディア 2
医療政策版思想マッピング	研究論文	患者支援者 1 医療提供者 4	政策立案者 1 メディア 2

〈2〉勉強会

○『勉強会』は、異なる背景をもつ参加者が、グループ研究に先立ち、医療政策・制度・システム等に関する基礎的知見や手法を共有することを目的に設計されています。

○「リーダーシップ」「実践の手法」「政策の知識」では、計14のテーマを設定し、気鋭の講師を招聘して、レクチャーとグループワーク(4つの立場の混在する班にわかれ、講師の提示する課題についてグループ討議)を行いました。

○「スキル演習」では、医療政策においてリーダーシップを発揮するための手法について実践的に学び、先進リーダーの取組から示唆を得ました。

○勉強会後は自主的な懇親会や学習会が開かれ、インフォーマルで活発な議論が展開されました。

第2期勉強会のテーマと講師（区分ごと開催順、敬称略、肩書は勉強会実施当時のもの）

区分	テーマ	講師
リーダーシップ	リーダーシップの旅	野田 智義 (NPO 法人 ISL 理事長)
	ともに生きる医療	高本 眞一 (三井記念病院 院長)
実践の手法	医療政策決定プロセス	曾根 泰教 (慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授)
	政策評価	宮田 裕章 (東京大学大学院医学系研究科 准教授)
	医療倫理	糸 和彦 (熊本大学発生医学研究所 准教授)
政策の知識	喫緊の医療政策課題	前村 聡 (日本経済新聞社大阪本社編集局社会部 記者) 林 敦彦 (朝日新聞社科学医療グループ 次長)
	医療・福祉財政論	新川 浩嗣 (財務省主計局 主計官)
	超高齢化社会と地域医療	辻 哲夫 (東京大学公共政策大学院 客員教授)
	医療と福祉の連携	大熊 由紀子 (国際医療福祉大学大学院 教授)
	医療と市場・経済	井伊 雅子 (東京大学公共政策大学院 客員教授)
	市民主導の医療	勝村 久司 (医療情報の公開・開示を求める市民の会 世話人) 埴岡 健一 (東京大学公共政策大学院 客員教授)
	医療の質と情報	埴岡 健一 (東京大学公共政策大学院 客員教授)
	地域主体の医療	信友 浩一 (九州大学 名誉教授)
	医療と安全	児玉 安司 (東京大学公共政策大学院 特任教授)
スキル演習	ロールモデルに学ぶ (3回)	松沢 成文 (前神奈川県 知事) 清水 康之 (NPO 法人自殺対策支援センターライフリンク 代表) 湯浅 誠 (反貧困ネットワーク/NPO 法人自立生活サポートもやい 代表) 石川 誠 (医療法人社団輝生会 理事長)
	政策提言リーダー研修 (2回)	H-PAC 運営事務局
	実践的グループワーク (3回)	高橋 泰 (国際医療福祉大学 教授) 高橋 都 (獨協医科大学 准教授) 戸ヶ里 泰典 (放送大学 准教授) H-PAC 運営事務局



勉強会風景



グループ研究風景

〈3〉公開シンポジウム

HPU/H-PACの活動の一環として、これまでに3回の公開シンポジウムを開催しました。概要は下記のとおりです(詳細なレポートはウェブサイトに掲載しております)

○2010 年度

2010年6月26日〔HPU創設記念シンポジウム〕「医療の質はどこまで見えるか ～データ活用で拓く将来像～」(於:東京大学 鉄門記念講堂)

医療の質の改善と均てん化(あまねく質の高い状況)の実現は、医療における現在の最大課題のひとつであり、そのためにはデータの活用が鍵となると考えられます。このテーマに関して、医療提供者、政策立案者、有識者、メディアと異なる立場の4人が基調講演をしました。医療の質と結びつけた診療報酬の支払い方法、データに基づいた診療報酬算定の可能性、在宅医療や地域医療における患者の生活の質を評価する方法など、課題の打開策に向けた新しい視点を含む重要な論点が示されました。

その後のパネルディスカッション「医療の質は見えるか」では、医療の質を測るデータの利用方法に関して具体的な提案も行われるなど、活発な議論が展開されました。

○2011 年度

2011年10月10日「医療政策の喫緊2テーマを考える」(於:東京大学小柴ホール)

診療報酬・介護報酬、医療計画という日本の医療の根幹を形成してきた2つの仕組みが改定され、今後の医療のあり方が方向づけられる局面を迎える中、4つのステークホルダーが集い、認識を共有した上で、多様な観点からの意見を集約し、実践の方向性を共に考える場とすべく、企画いたしました。

パート1「診療報酬編」では、現状と課題について政策立案者・患者支援者の立場から講演いただき、その後のパネルディスカッションにおいて、医療提供者・メディアの方も加わり、いま必要な診療・介護報酬改定を議論しました。また、パート2「地域医療計画編」では、医療計画見直しの議論の概要、地域の医療機能を知ったうえでの計画立案に必要なデータベースの紹介、東京および石巻での地域医療の実践例の報告、を講演いただいた後、患者支援者・メディアの立場の方も参加し、パネルディスカッションを行いました。

150人以上の方にご参加いただき、満席のフロアからの発言も交えた活発な議論が展開されました。

○2012 年度

2012 年 8 月 18 日 「徹底研究:医療を動かす、医療計画作りとは」(於:東京大学 伊藤謝恩ホール)

昨年度のシンポジウムに引き続き、各都道府県で 2013 年 4 月から実施されるべく策定されている途上の医療計画をテーマとしました。「5 疾病・5 事業および在宅医療」の連携体制の構築を具現化するため、どのようなプロセスで、どのような計画を作ればいいのか、考える機会としました。

パート 1「医療計画について」、パート 2「良い医療計画の作り方」、パート 3「地域の立場から」、パート 4「在宅とがんの計画の場合」では、有識者、政策立案者、医療提供者、患者支援者の立場の演者 11 人にご講演をいただきました。その後、講師と 152 名のご来場者と一緒にディスカッションを行いました。実際に計画作成に携わっている地方自治体行政担当者の方々も多数来場されており、活発な議論が展開され、課題と実行につなげる方策などが浮き彫りになりました。



2012 年度公開シンポジウム風景

〈4〉成果発表会

H-PACのグループ研究活動は、社会の現実的な受け手に提言することを目指して行われます。プログラム終了時に開催する成果発表会は、コミュニティ内での活動と相互フィードバックにより得られた成果を、社会に向けて発信する第一歩の場です。「医療を動かす」プロセスにおいて各ステークホルダーの頂点に立たれ、意思決定を行われている方々に向け、訴求力のあるプレゼンテーションに磨き上げることが求められます。

2013年3月17日に行った第2期成果発表会では、各グループからのプレゼンテーションに対し、お二人のゲストコメンテーターから親身なアドバイスや、今後の活動継続・実践につながるコメントを頂戴しました。

第2期成果発表会 ゲストコメンテーター (五十音順, 所属・肩書きは開催当時)

- | |
|----------------------|
| ◎原 徳壽 氏 (厚生労働省 医政局長) |
| ◎横倉 義武 氏 (日本医師会 会長) |

〈5〉H-PAC第2期 成果物の公開

2013年3月現在、H-PAC2期同窓会が成果物の公開に向け、ウェブサイトを準備中です。



■H-PAC 第2期 参加者

「患者支援者」「政策立案者」「医療提供者」「メディア」の4つの立場から募集し、経歴と小論文の内容に基づく採点委員会による審査・選考を経て、38人が参加しました。

内訳と参加者の主な属性等は次のとおりです。なお、参加者の居住地は首都圏にとどまらず、遠隔地からの参加も複数みられました。

- 患者支援者** 8人(患者団体主宰者、医療事故被害者支援団体主宰者、医療ソーシャルワーカーほか)
- 政策立案者** 9人(厚生労働省中堅職員、市議会議員、自治体職員、経営コンサルタントほか)
- 医療提供者** 12人(病院勤務医師、診療所医師、歯科医師、理学療法士、製薬企業社員ほか)
- メディア** 9人(全国紙一線記者、テレビ局一線記者、専門誌編集者、広告代理店社員ほか)

■H-PAC 2 期生 参加者の声 (各ステークホルダー50音順、敬称略)

〈患者支援者〉

安仁屋 衣子 (医療ソーシャルワーカー)

H-PAC の魅力の大きなひとつは、心意気のある異なる立場の仲間と出会えることです。一年を通して自らの考えを伝えることの難しさを実感すると同時に、図らずも相手を否定批判するのではなく代替案を提示するトレーニングをしていました。結果ほんの少ですが俯瞰的に事象を見ることが出来るようになったと思います。皆さんもこの空間をぜひ味わってください。



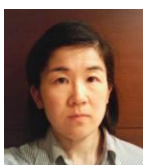
大山 正夫 (患者の権利オンブズマン東京)

毎週水曜日の夜は、年の前半が講義、後半がグループ研究、たまに土曜日がスキル演習であったという間の1年間でした。講義後は近所で自由参加による夜遅くまでの飲み会・交流会がまた格別の絆づくりで一層の学習効果を高めました。最終成果物が評価されるので戦々恐々でしたが、それにめげない精神力も十分教えて頂きました。



川田 綾子 (NPO 法人架け橋、医療の良心を守る市民の会)

最も印象的なことは、1人称で語ること。「私」がどう考えどう行動するかが、政策を動かすことにつながる。1人称で語る責任は、より人とのつながりを認識するに至ります。医療事故被害者の遺族という、医療側から見ると憎々しい存在で、患者や社会一般から見るとかわいそうな存在で、“触れない方が良さそう”と思われがちですが、H-PAC メンバーはそんな立場の私に本音で議論をしてくださいました。



佐伯 晴子 (東京SP研究会)

患者の立場で医療コミュニケーションの活動をしています。著名な講師陣に直接お話を伺い人間性に心動かされました。在野で研究と発表の機会もいただけ感謝します。医療を地域の自治としてとらえ住民や納税者が医療政策に参画するよう今後も活動を広げます。同期や先生方との出会いを財産に、医療を動かし持続可能な形で次世代に引き継ぎたいと思います。



〈政策立案者〉

池田 美智雄 (産業経営コンサルタント)

一緒に学んだ4つのステークホルダーの皆さん、お世話になった事務局の方々、バラエティーに富む講師の方々、フィールドワークに協力いただいた訪問看護ステーションの皆さん、研究調査のためにお会いした学者やコンサルタント、NPO 法人の皆さんなど、80人以上の方々との新たな出会いが掛け替えのない財産です。今後に繋がる充実した1年でした。



國光 文乃 (厚生労働省医政局医事課)

4つのステークホルダーが集い、様々なテーマについて建設的な議論を行う環境こそ、H-PAC の強みです。さらに、素晴らしい講師陣や仲間とのネットワークは、多方面に渡り大きな糧となります。まずは門を叩いてみませんか。新たな視界が開けることでしょう。



田中 剛 (厚生労働省障害保健福祉部企画課)

日々の政策立案も真剣勝負。今更ながらと半信半疑で参加したH-PACだが、年齢や立場は関係なく、その自由闊達な議論と熱意、行動力に驚く。またチーム活動では、「仕事でもないのに、ここまでやるか」と思われるほど大人気ない喧嘩。ただバラバラながらも得意分野を活かし、共通認識を得て未熟ながらも成果を出すことは大いなる自信に繋がろう。



田井 秀明 (千葉県いすみ市議会)

市議会議員として市の特色ある医療政策を具現化してきましたが、第一線で活躍する H-PAC の講師の専門的な講義は政策を開花させるための知識と情熱を与えてくれます。そして、参加者との多角的な議論は発想の転換と変革への動機付けを与えてくれます。研究とともに、講師や参加者のつながりで生まれる「放課後・課外活動」では、医療も政策を動かすのもチームワークだと実感できます。



〈医療提供者〉

石塚 幸江（中外製薬株式会社オンコロジー ライフサイクルマネジメント部）



4つのグループ研究(うち1つはリーダー)に参加させていただきました。この1年間で医療についての視野が広がったことは大きな変化でした。様々な経験・視野を持つ仲間たちと出会い、話し合い、ぶつかり、その結果として短い期間に成果物にまで纏めあげられたのは、貴重な経験であったと思います。

花木 奈央（名古屋第二赤十字病院救急科）



H-PACに参加し、医療を考える自分の視点に偏りがあつたことに気がきました。広い視野・様々な角度から物事を見ることで、本質に近づくのだと思います。H-PACでの時間は、大切な仲間との出会い、さらには自分自身でも驚いたことに、大学院進学を連れてきました。この出会いに感謝し、これから先もよりよい医療の実践者であり続けたいと思います。

河内 文雄（医療法人社団以仁会）



家のそばで小さな女の子が、器用に一輪車をあやっています。しかし彼女がいかに一輪車の達人であろうとも、行くことができるのはせいぜい隣町くらいまででしょう。それに対して四輪車は、道なき道をひた走り、その気になれば世界一周だって可能にする力を持っています。H-PACの存在意義とはそのようなものであると思います。

三好 都子（医療法人社団鉄祐会祐ホーム クリニック）



「4つのステーキホルダーによるシナジー効果で医療を動かす」、これはH-PAC最大の醍醐味です。医療提供者のみでは実現が難しいことも、複数のステーキホルダーの強みを出し合うことにより、目標の実現に近づけることを体感してきました。H-PACでの様々な経験、仲間との出会いは、私の人生の宝物、そして今後の指針になると確信しています。



〈メディア〉

今井 孝芳（日本経済新聞社会部医療班）



日々の取材を通じメディアの立場から患者支援者、政策立案者、医療提供者はそれぞれ交わりが少ないと感じていました。記者の仕事の1つは記事で物事の価値を高めたり広めたりすることだと考えていますが、4つの立場の人が目標に向かって集まれば新たな医療の価値を生み出すことができると可能性を感じました。何者にも代え難い人脈と視点を得られた1年でした。

岩崎 賢一（朝日新聞科学医療部）



医療はなぜ変わらないのか。この10年感じていた。メディアで、政策の現場で、医療関係者の議論で、論点はほぼ出そろっている。H-PACに参加しても、本音や本質をぶつけ合うだけでは「壁」の高さを実感して終わってしまう。H-PACのミッション「医療を動かす」ために必要なのは、協業によるモデルの創出と継続であり、リーダーシップだと改めて感じた。

中野 園子（三省堂一般書出版部）

市民からの医療政策研究、実践チームとして名高く、異彩を放っているH-PACの意義を十分に体感できた1年間でした。後半は、「事前指示書」の周辺と必要性をさぐるテーマに集った異職種の仲間とのグループ研究、初めての論文書き。志高く有能な方々との出会いもありました。高齢社会でますます必要とされる国民的なテーマでもあり、さらに継続し社会への発信をしていくことになると思います。

増田 英明（電通パブリックリレーションズ ヘルスケアコミュニケーション）



医療情報の非対称性を何とかできないかとH-PACの門を叩きました。一流の講師陣による勉強会。4つのステーキホルダーの仲間とのグループワーク、グループ研究、そして懇親。理の眼が啓き、情けの心が深まった1年でした。一番大事なものは人との繋がり。情と理を尽くせば化学反応が起きる。乗り越えられないものはない。そう確信して“次”に進みます。

【問い合わせ先】

**東京大学 公共政策大学院 医療政策教育・研究ユニット(HPU)
医療政策実践コミュニティー(H-PAC)事務局**

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

電話 03-5841-7879

E-mail h.pac.jp.info@gmail.com

URL <http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/HPU/> (「東大 HPU」で検索)

*****原則として電話によるお問い合わせはご遠慮ください*****